

皇太神宮御田扇祭
 お扇さん余話
 山方(古部筋)手永



目次

| | |
|---|-----|
| はじめに | 〇一頁 |
| 第一扇 御田扇祭神事 | 〇二頁 |
| (一) 祭典の大綱・(二) 神輿の渡御・(三) 神輿の引き継ぎ | |
| 第二扇 御田扇祭の起源 | 〇六頁 |
| (一) 明和の頃の説・(二) 慶長の頃の説 | |
| 第三扇 御田扇祭の現状 | 〇八頁 |
| 第四扇 御田扇祭と伊勢神宮 | 一〇頁 |
| 第五扇 御田扇祭と藩政 | 一一頁 |
| 第六扇 六手永の変遷 | 一四頁 |
| (一) 山方(占部筋) 手永・(二) 堤通手永・(三) 北山中(額田筋) 手永 | |
| (四) 東山中手永・(五) 上野(長瀬筋) 手永・(六) 川西手永 | |



第七扇 御田扇祭の抛り所・・・・・・・・・・二七頁

(一)御田扇祭は春祭と夏祭の混在・(二)古語拾遺の烏扇

第八扇 御田扇祭関連資料・・・・・・・・三〇頁

第一節 御鋤神事

第二節 御田植神事

第三節 土呂山畠今昔実録

第四節 日本三大御田植祭

(一)伊雑宮・(二)香取神宮・(三)住吉大社

第五節 近郊の御田植祭・・・・椿大神社

おわりに・・・・・・・・四六頁

参考文献・・・・・・・・四八頁



はじめに

皇孫瓊杵尊にぎのみことは、三種の神器（劍、鏡、勾玉）に加え日本人の主食である稲の種粃を携え降臨された。神道において米は高天原に由来する特別な作物とされている。

以来、稲作に携わる人々は、夏の蒸し暑い太陽に照りつけられ一斉に空に向かって力強く伸びていく稲苗の姿を見て感動を覚える。そして、豊かな黄金の稲穂が波打つ秋に思いを込めて祈りを捧げる。その祭りが「御田扇祭」である。

正式には「皇太神宮御田扇祭」と称し、地域の人々は親しみを込めて「お扇おぎさん」と呼んでいる。これは、伊勢市楠部にある神宮神田において御田植神事に檜製の「御田扇」を用いて神田を扇ぐ神事に由来し、その檜製の扇を皇太神宮より頂き



犬尾神社から稻荷社へ神輿の渡御

地域の神輿に納め五穀豊穰の神様として村々を練り歩き、虫除けと豊作を祈る祭りとして続いているのである。

平成十七年に下和田町犬尾神社は、井内八幡宮より「扇さん」を迎え、翌年に国正町稻荷社に送り届けた。これを機会に扇さんなどに係わる事柄を取り纏めることとした。

第一扇 御田扇祭神事

(一) 祭典の大綱

御田扇祭は、神社における「送り神事・迎え神事」の祭典と神輿の渡御との二つに大きく分けることができる。

祭り全体としては、前年の当番神社において送り神事が執り行なわれ、送り役が当年の当番神社の氏子地境まで神輿を先導



する、そして、氏子地境より送り役が神輿の護衛役にまわってそこからは、当番神社の役員が当番神社へと神輿を巡幸し迎え神事が執り行われる。迎えた一年間は、当番神社にご神体が鎮座されて翌年に同様の手順で次年度の当番神社へと遷座されていくのである。

(二) 神輿の渡御

御田扇祭は、神輿の出発に向けての祭典である「送り神事」から執り行われるが、神事については神社宮司により差違がみられる。また、威儀物なども手永の特徴があり画一的ではない。ここでは「山方手永」について記述する。

神事は、修祓のあと神前に向かい一同一拝・神輿の開扉・祝詞奏上・神幸列次を整え、御神体を神輿に遷し渡御となる。



神輿の行列と威儀物は、道中を清祓する神主↓御田扇祭役員等
↓御幣↓赤扇↓神輿↓神輿台↓榊桶（根付）↓日月旗二本↓白
扇↓雪洞一對↓花傘↓梵天↓白幟十三本（各町一本）↓子供会
神輿↓交通安全旗等↓太鼓（音曲）となる。

神輿の行列は、手永や村によって非常な賑わいを見せたと伝えられている。その一つに「祝い歌（木遣り）」がある。祝い歌には八種類ほどの歌詞があり、歌い手一人に対して全員で盛大に合いの手を入れながら進んだと言われている。

（三）神輿の引継ぎ

神輿は、道中で休憩（往時は休憩場所で祝砲を上げ余興等が行われた）を取りながら氏子地境で神輿の引継ぎが行われる。神輿の引継ぎ式は、送り側と迎え側が相對峙してそれぞれ挨拶

祝い唄「木遣り」の一例

- ★今日はナー目出度のヨ（ヤレヤレー）
御田扇ナーさまヨ 送るナー町内衆はヨ 皆ナそろってヨ（ホラーホイ ホラーホイ）
- ★五万ナー石でもヨ（ヤレヤレー）
お城ナー下までヨ 舟がナーつくヨ（ホラーホイ ホラーホイ）
- ★米のナーなる木でよ（ヤレヤレー）
わらじをナーつくりヨ ふめばナー小判のヨ 音がするヨ（ホラーホイ ホラーホイ）

を行い、これまで先導役と清祓を行なって来た者は見守り役として護衛にあたり、迎える側の神主と役員がそれを引き継ぐことになる。

神輿行列を再開し迎える側の神社に到着すると神輿内の御神体は本殿へ遷される。その後、全員が神社前に整列し、威儀物の受け取りに際しての目録の確認が行なわれ、境内に用意された取り付け場所にそれぞれの威儀物を取り付けていく。

ここで休憩に入り、神社到着の慶びを顕す祝砲を上げ、境内に集まった参列者にお神酒やお菓子などが振舞われる。そして境内の参列者の賑わいが一段落ついでから役員と関係者において神事が執り行われる。

この一年は、この神社を鎮まり処として関係神社および村の豊作と弥栄を祈念する祝詞が奉上されるのである。

引き継ぎ挨拶要領

- 迎え側代表：これまでの道中、ご無事にてのお神輿奉載ご苦労さまでございます。これよりは〇〇神社の氏子地内となります。これからのお神輿の奉載役を務めさせていただきます。
- 送り側代表：お出迎えありがとうございます。それでは、お神輿の奉載役をよろしく願い申し上げます。
- 迎え側神職：それでは、これより道中清祓い大麻所役（オオヌサショウヤク）ならびに切麻所役（キリヌサショヤク）を務めさせていただきます。
- 送り側神職：どうぞよろしく願い致します。
- 迎え側代表：では、道中ご案内を申し上げます。

第二扇 御田扇祭の起源

御田扇祭の起源については、明和（一七六四）の頃であるとする説と慶長（一五九六）の頃であるとする二つの説がある。さらに三河地方の習俗・習慣・祭事等が記述されている「参河聡視録」には、「御田扇祭は御鋏祭から移行されたものではないか」とも記されている。これらのことから五穀豊穡を願い地域に根対っていた「虫送り」の習俗に伊勢信仰としての御鋏神事や御田植神事の影響によるものと思われる。いずれにしても明確な時期は不明といわれている。

（一）明和の頃の説

御田扇祭と同様にこの地方で行なわれていた御鋏祭との関係



を考慮したものであって、伊勢神宮において行なわれていた「御鋤神事」に由来するものとされている。

岡崎には豊作を祈るために創建されたとされる御鋤神社（氏神六社、境内社二十七）と称する神社が数多くみられる。この神社の社殿には鋤の形をした木片が納められていることが多く、それゆえに御田扇祭の神輿に納められた鋤形の木片と関連付けられているのである。

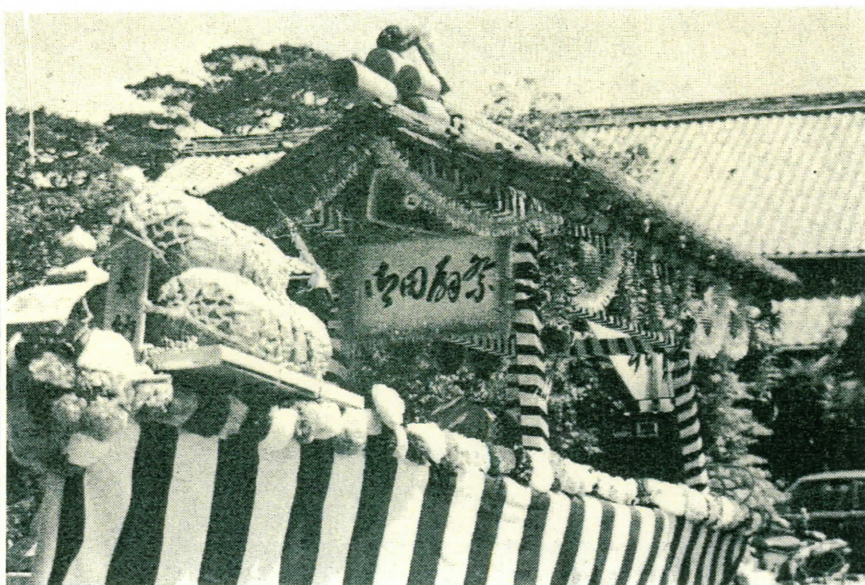
この鋤社の創建に関しては、明和五年（一七六七）頃に成立した「土呂山畠今昔実録」のなかの記事に見られる。そのことを根拠に明和の頃より始まったと言われている。

（二）慶長の頃の説

慶長の頃の説についても御鋤祭との関係を認めるなかで五十

御鋤祭の概要

三河地方における御鋤祭は数回の流行があり、特に明和四年が百年目ということもあって、下中島地域では熱狂的な祭りであったと伝えられている。往時の行列には十間余りの舟や七、八間の鯉などの作り物が出たそうである。



代の桓武天皇かんむの代の延暦十四年（七九六）に大内神泉苑にて行なわれた「御鋏神事」が中断後、百八代ごみずのおの後水尾天皇の代の慶長十八年（一六一三）に伊勢神宮において行なわれたのとの記述をもとにしている。

併せて古老の伝承でもある「御田扇祭は、慶長六年に岡崎城主になった本多豊後守康重（土井町出身）が始められた」との内容をふまえ慶長年間ではないかと言われている。

第三扇 御田扇祭の現状

御田扇祭は、全国でも旧岡崎藩（一部九州の細川領）のみに見られる習俗である。この祭りは、天和二年（一六八二）ころより幾多の流行が繰り返されてきた御鋏祭が御田扇祭に変遷



式典を終え神輿巡幸前のひととき

町内総出で行列を編成

するなかで、五穀豊穰を願う農民の伝統的な祭りとして受け継がれてきたものとみることができる。

今日においても往路の体制で行列を組んで村々を巡幸する形を維持・継続しているのは、六つの手永のうち占部川沿いの「山方手永」と矢作川沿いの「堤通り手永」の二つの手永のみである。なかでも堤通り手永については、御鋤祭の形態が最も色濃く残されている手永といえる。

一方、上野手永は、村々の巡幸をせずに各村の代表が畝部西町の神明神社に集まり、式典の後に町内の人達で村を一巡する方法で行なわれている。

また、現在のように神輿の巡幸が一ヶ村一年単位となったのは明治二十五年頃と福桶町が昭和五十七年に発刊した「扇さんあれこれ」に記載されていることから、それ以前は一日に数ヶ



神輿が迎え神社に到着

村々の豊作と弥栄を祈念

村を廻っていたようだ。

第四扇 御田扇祭と伊勢神宮

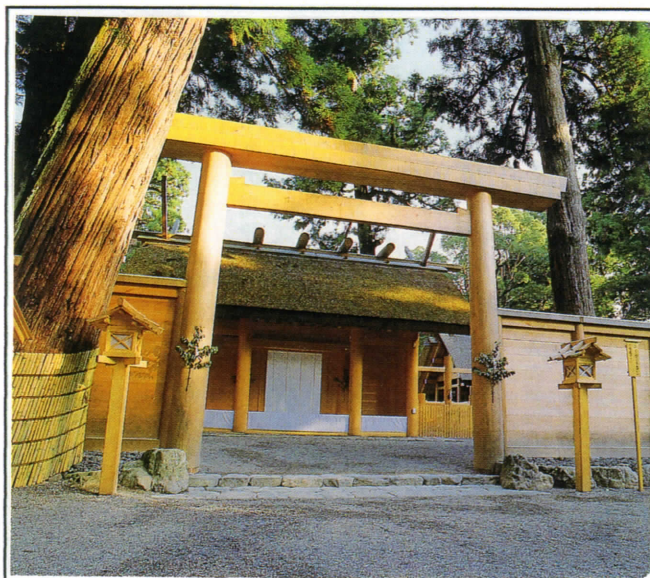
御田扇祭は「皇太神宮御田扇祭」と称するが、伊勢神宮の内宮（祭神天照大御神）よりも農耕に関りがある外宮（祭神豊受大御神）の方に関係が深いようである。その主たる理由は

◆豊受大御神は、とようけびめのかみ豊宇気売神と同一神といわれ、いざなみ伊弉冉の神がひのかぐつち火三迦具土神を生むおり火傷を病み、苦しみ伏した際に生れた六神にうちのわくむすひ和久産巢日の子とされている。豊は美称、宇気は食物を表し単なる食物神ではなく稲の神として捉えられ、また、はたつもの たなつもの神代において陸田種子・水田種子および蚕種を創られて、我が国が農業を生活の基本とする道を教えられた大神であること。

伊勢神宮外宮の由来

外宮の「止由気宮（トユケノミヤ）儀式帳」に雄略天皇の時代に天皇の夢に天照大神が現れ「自分一人きりでいたのではとても苦しいし、食事も安らかにできない。丹波国比治の真奈井にいる等由気大神（豊受大神）を、私のもとに連れてくるように」と告げられ、天皇は丹波国から豊受大神をお迎えして大宮を建て鎮座させられたとある。これが外宮の由来とされている。

第六十二回神宮式年遷宮外宮正宮



◆明和の頃は、天照大御神に供える御供物を採る地の伊雑宮が勤請の対象であったが、文政の頃は、御師（御祈祷師）などによつて外宮の御鍬神事が地域に伝播され伊雑宮から伊勢神宮に遷り変わったとみられていること。

◆外宮において五月下旬の吉日に大御田おみたで御田植の神事が行なわれていた。その神事のなかに『上幅ともに一尺余りの扇をつくり、これを「御田くばり扇」と称し、田畔に刺せば虫除となる」とて、争うてこれを貰うという風があつた』とあること。などから御田扇祭のお札は外宮で拝受されていると思う。

第五扇 御田扇祭と藩政

岡崎藩領は五万石と言われているが、東海道の矢作橋の管理

お田植神事は五月上旬の吉日に・



「団扇合わせ」のとき
畔では「行司取り」が舞われる

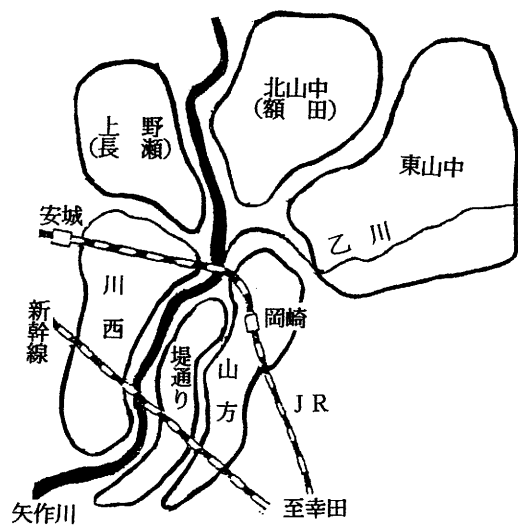
料として一万石が付加され実質的には六万石であった。これを村方一万石相当に六地域に分け、それぞれを「手永」と称していた。その手永の最高責任者として大庄屋という管理職を定めていた。

この手永と呼ばれる組織は、藩内の統制を円滑にすることを目的とした行政区でもあった。そして、その長である大庄屋は世襲制であることが多かったが、行政能力を持つことが条件であったため必ずしも世襲でない場合もあったようだ。

また、この行政組織と御田扇祭とはもともと無関係であったが、百姓一揆などの農民組織の反乱を阻止するための政策と併せ、地方役人の怠惰を監視するための策として、もともとこの地域にあった「虫送り」と言われる虫の害除けの風習に併せて、御田扇祭を執行するようになったようである。その

享和2年(1802)の手永別石高表

| 手永名 | 庄屋名 | 庄屋居住 | 石高 |
|-------|-----|------|--------|
| 山方手永 | 斎藤 | 六名 | 9,998 |
| 堤通り手永 | 長嶋 | 中之郷 | 11,195 |
| 川西手永 | 太田 | 下佐々木 | 11,951 |
| 上野手永 | 岩月 | 中園 | 10,588 |
| 額田手永 | 神尾 | 藪田 | 8,140 |
| 東山中手永 | 永井 | 洞 | 7,381 |
| 岡崎町廻り | | | 1,116 |
| 石高合計 | | | 60,368 |



ため、この御田扇祭は行政組織として関係のある岡崎藩本多家の領内のみに見られ、寺社領や本多家領地の外では行なわれていなかった。

このように行政政策の一環であることなどから藩主の名代や大庄屋がこの行列に加わったことや、祭り費用を領主が出したこと、各手永に御田扇の神輿が下賜され祭りを執行させていたことが伝承されている。そのことは、御田扇行列の威儀物の中の日月旗に「本」の文字や「立葵」の紋などが見られることからも伺える。それゆえ大庄屋もこの御田扇祭を非常に重く捉えていたようで岡崎市史には「文政三年額田手永御田扇様順村触」のなかに「前々在来り候通り、大ばた・小ばた其他品々継村へ念を入改相渡し可被成候、例年之通其他おごりケ間敷儀決無之様可被成候、為念申入候」と嚴重に注意を促していたのである。



★安政五年（一八五九）の大庄屋
 川西手永 小川惣右衛門（佐々木）
 山方手永 斎藤孫左衛門（六名）
 北山中手永 神尾彦右衛門（藪田）
 上野手永 岩槻吉兵衛（中園）
 堤通り手永 長嶋藤八郎（中之郷）
 東山中手永 永井利右衛門（洞）
 ☆文久二年（一八六三）の大庄屋
 川西手永 太田伊兵衛（下佐々木）
 山方手永 斎藤孫左衛門（六名）
 北山中手永 神尾彦右衛門（藪田）
 上野手永 岩槻吉兵衛（中園）
 堤通り手永 長島力三郎（中之郷）
 東山中手永 永井利右衛門（洞）